

大学を歩く

Today's College Scene

毎週金曜掲載

東京都市大



ネパールも学びの場



①現地で購入した土産物を並べながら、「ネパールプロジェクト」の方向性について議論する学生たち（東京都市大・横浜キャンパスで）＝川口正峰撮影
②キャンドルに火をともしながら、キャンパスイルミネーションの構想を練る学生たち（同・世田谷キャンパスで）＝保井隆之撮影



自分の糧になるものを

在学中は、横浜キャンパスISO事務局のスタッフを務めました。また「ISO14001」を取得して2年目で、この国際環境規格をどう生かそうかと模索していた時期。教員、職員の発想だけでなく、学生の視点も必要ということでも声がかかったようです。



理系、文系の多彩なフィールドから教員が集まっているのが、環境情報学部の特徴。環境への思いは同じでも、おのずとアプローチは異なります。意見から自分の糧になるものを見つけてほしい。そうすれば、社会に出て課せられるミッションを成功させる確率も、ぐっと高まると思います。

二コン勤務 青柳 佑典さん 29

を調整するには、先生に対しても言うべきことははっきりと言わなくちゃいけない。こうした経験が、からまったおもをほどくように、異なる部署の意見をまとめ上げていかなければならない現在の生産管理の仕事に生きています。

沿革 2009年、武蔵工業大学と東横学園女子短期大学が統合し、校名を東京都市大に変更した。武蔵工大の前身は、1929年創立の武蔵高等工科学校。東横学園女子短大の前身は、39年創立の東横商業女学校。世田谷区玉堤の世田谷キャンパスに工、知識工、横浜市都筑区の横浜キャンパスに環境情報、世田谷区等々力の等々力キャンパスに都市生活、人間科学の計5学部16学科がある。学生数は約6400人。今春から、同大が開発した水素燃料エンジンを結ぶスクールバスとして運行している。

新しい街づくりが進む横浜市の港北ニュータウン。その一角にある東京都市大学の横浜キャンパス（都筑区）は、緑豊かな住宅街に溶け込んでいた。

1998年、日本の教育機関としては初の国際環境規格「ISO14001」を取得したキャンパスでは、ネパールとの国際協力プロジェクトが進められていた。学生が現地を訪れて大学生とペアを組み、約2週間、野外調査を行う。途上国の視点から環境問題を考えるのが目的だ。

企画・運営するのは、授業を履修した学生有志らでつくる「ネパールプロジェクト」。環境情報学科4年の清水恵子さん（22）は「例えはバイオガス発生装置が環境によっても、村人の年取に近い費用や土地が必要では、導入は進まないんです」と力を込める。

清水さんは来年から、JICA（国際協力機構）の準備に学生たちが没頭していた。住民らに大学の存在をアピールする恒例のイベント。今年は約200人が手がける17の作品が並ぶ。企画を立案した小林茂雄准教授（41）は、「縮小した模型ではなく、実空間を生かした大きなスケールのデザインと徹底的に向き合いつめてほしい」と話す。

建築学科2年の小林寛さん（21）の班は、建物のらせん階段を飾り付けることにした。5色の光を絡み合わせ、見た人の心の中に多重奏が流れるような作品にしたいという。「泊まり込みで作業した時期もある。大きな作品を作った経験は、将来、絶対に役立つはず」

庄内柿の販路拡大 等々力キャンパス（同区等々力）では、山形特産の庄内柿の販路を拡大するため、首都圏の女子高生らをターゲットにした商品開発（18）は言う。

開発したのは、チップス感覚で食べられる果肉入りそんな教育方針が浮かんできた。見えた。（保井隆之）

編成、7月から市場調査をした結果、16種類が採用された。来年1月、都内で販売されることになった。

「地味、年配の人しか食べない、甘過ぎて飽きるな」と、女子高生が柿に対して持つイメージは悪い。それ（21）は「商品を作るのにこころは、美容健康志向に訴え、学校でおいおい言いながら食べられるお菓子にすればと考えた」と都市生活だ」と感概深げ。

学生の自主性を引き出し、現場での体験から学ばせる。三つの取り組みから、